

## Thomas Hardy の短編小説 “To Please His Wife” における irony

信 岡 良 奈

“To Please His Wife” (1891) は、短編集 *The Life's Little Ironies* (1894) に収録された作品である。「妻を満足させるために」と直訳されることから、しばしば「妻ゆえに」と題され、また詩 “The Sailor's Mother”<sup>1</sup> にも関連のあるこの短編の中で、Hardy は、とどまることを知らない「内紛的な女性の嫉妬」“internecine female jealousy” (Dutta101) から、夫と二人の息子の喪失という結末によって irony を表現している。Kristin Brady は、この作品のテーマを「野心と、それがもたらす自己と家族の破壊力」“... ambition, and its capacity for destruction of the self and family” (Brady128) とし、これは同時にこの作品が収録される短編集 *Life's Little Ironies* の中心的テーマでもあるとしている。Hardy は、虚栄心の強い野心家の主人公に Joanna を置き、彼女の「対照物」‘foil’ (Brady130) である友人 Emily の生活よりも経済的に豊かな生活を送りたいという願望を追求しすぎたために、夫と最愛の息子を海に奪われ、挙句の果てには、Joanna は一人残され、嫉妬の根源とも言える Emily の家で生活面の保護を受けながら、帰る見込みのない家族の帰還を待ち続けるという女の半生を描いている。つまり、この “To Please His Wife” は、「女性」と「結婚」をテーマにした、一人の女性の野心が引き起こす人生の irony なのである。作品の中では、難破から難を逃れ、長年の航海から数年ぶりに故郷 Havenpool Town に帰還した船乗り Shadrach Jolliffe と、彼をめぐる二人の女性 Joanna と Emily を中心に、そこから派生した Shadrach と Joanna、また Emily と年の離れた豪商 Lester という二組の夫婦の結婚生活が対照

的に描かれている。本稿では、これら二組の結婚生活に焦点を当て、主人公 Joanna の野心や虚栄心を中心に描かれる作品の主題でもある irony について考察してみたい。

“To Please His Wife” は、港町 Havenpool Town を舞台に繰り広げられた作品である。そして、物語は St James’s Church でちょうど日曜の礼拝が終わった場面から始まる。家路に向かおうとする会衆たちの前に突如現われたのは、数年前航海に出たまま行方不明になっていたこの町出身の青年 Shadrach であった。のちの Joanna の夫となる人物で、終始彼女の野心を満足させようと奮闘する男である。難破から九死に一生を得たことで、感謝の祈祷を捧げるために教会を訪れた Shadrach は、礼拝に参加していた二人の女性 Joanna, Emily と対面することになるのだが、最初に彼の関心を惹いたのは、Joanna ではなく心優しい Emily の方であった。教会を去った後、前方を歩く Emily と Joanna を目にし、並んで歩く町の住民に二人のことを尋ね、その後、彼女たちのもとへ近づき Shadrach が言葉を交わす場面がある。

‘Who may them two maids [Joanna, Emily] be?’ he[Shadrach] whispered to his neighbour.

‘The little one is Emily Hanning; the tall one Joanna Phippard.’

‘Ah! I recollect ‘em now, to be sure.’

He advanced to their elbow, and genially stole a gaze at them.

‘Emily, you don’t know me?’ said the sailor, turning his beaming brown eyes on her.

‘I think I do, Mr Jolliffe,’ said Emily shyly.

The other girl looked straight at him with her dark eyes.

‘The face of Miss Joanna I don’t call to mind so well,’ he continued.

‘But I know her beginnings and kindred.’

(“To Please His Wife” 108, 以後同書からの引用は頁数のみを示す)

Joanna, Emily たちとの対面で、Shadrach の心を惹きつけているのは Emily であることは明白である。一方、Shadrach の Joanna に対する記憶は不鮮明で、彼女の顔を思い出すことができないと発言しているにもかかわらず、彼女の幼少時や一族については覚えているという若干矛盾した発言などからも、Shadrach が現在の Joanna に対して特別な感情を持っていないことが推察できる。

このようにして Shadrach, Joanna, Emily の三人は、お喋りをしながら教会から家路に向かうのだが、Emily に関心のある Shadrach は、彼女と別れた後再び、彼女の家へと引き返す。ちょうどお茶の準備をしようとしていた Emily 父娘に加わり、航海の話などをしていくうち、Emily も「どういうわけかその日曜の夜 Shadrach にすっかり心を奪われ、一、二週間うちに二人の間には気持ちの分かり合える関係ができた」“Somehow Emily Hanning lost her heart to the sailor[Shadrach] that Sunday night, and in the course of a week or two there was a tender understanding between them.” (109) のである。しかし、この Emily の家での出来事から間もないある月明かりの夜、Shadrach は道でばったり Joanna と再会し、これを境に Shadrach の好意の矛先は、Emily から Joanna に転換する。欲念の強い Joanna は、Emily から Shadrach の奪還に成功したのである。奪還のきっかけにもなった Joanna と Shadrach におけるこの夜の出来事を、「Shadrach は、その歩きの中で言ったことやした事をどうしてもはっきりと思い出すことができなかった」“What was said and what was done on that walk never could be clearly recollected by Shadrach...” (109) と述べているところに、Joanna の女性としてのしたたかさをうかがい知ることができる。Brady は、Joanna による Shadrach のこの奪還について「皮肉なことに、男女間という領域における Emily への勝利が、Joanna の社会的上昇を阻止している」“... ironically, a triumph over Emily in the sexual arena prevents Joanna’s advancing socially.” (Brady129) と述べている。つまり、Joanna による Shadrach の奪還は、この行為自体がその後

の Joanna と Emily との経済面における差異を生み、とどのつまり、それは Emily に対する嫉妬をさらに刺激していくことにもなるのである。

女の意地とも言える不純な感情から Shadrach の奪還に成功した Joanna だが、ひとたびその成果に満足すると今度は、Shadrach の船乗りとしての社会的地位に思いをめぐらせ始める。

Joanna was not altogether satisfied with the sailor[Shadrach]. She liked his attentions, and she coveted the dignity of matrimony; but she had never been deeply in love with Jolliffe. For one thing, she was ambitious, and socially his position was hardly so good as her own, and there was always the chance of an attractive woman mating considerably above her. (109)

Shadrach の奪還という野心は達成されたものの、Joanna の打算は、Emily の心痛を考慮した「良心」‘conscience’ (109) という偽善的言葉で包み隠して正当化することによって、彼を Emily に委ねようという考えに達し、Emily の家を訪れる。しかし、そこで Shadrach による Emily への愛の告白を盗み聞き、再び嫉妬の炎を燃やした Joanna は、Shadrach の返還という考えを一転させ、意地とプライドで彼と結婚することを決意するのである。これもまた、Joanna の野心の表れと言えるだろう。

Joanna と Shadrach の結婚からまもなく、Emily も年の離れた豪商 Lester に見初められ結婚するのだが、ここに住居の位置関係における irony が見受けられる。Lester 夫妻は、皮肉なことに Shadrach 夫妻の向かいに居を構えるのである。

The worthy merchant's home, one of those large, substantial brick mansions frequently jammed up in old-fashioned towns, faced directly on the High Street, nearly opposite to the grocery shop of the Jolliffes,

and it now became the pain of Joanna to behold the woman whose place she had usurped out of pure covetousness, looking down from her position of comparative wealth upon the humble shop-window with its dusty sugar-loaves, heaps of raisins, and canisters of tea, over which it was her own lot to preside. The business having so dwindled, Joanna was obliged to serve in the shop herself, and it galled and mortified her that Emily Lester, sitting in her large drawing-room over the way, could witness her own dancings up and down behind the counter at the beck and call of wretched twopenny customers, whose patronage she was driven to welcome gladly; persons to whom she was compelled to be civil in the street, while Emily was bounding along with her children and her governess, and conversing with the genteelest people of the town and neighbourhood. (113-114)

ハイストリートに直接面した Emily の家は、大きくて頑丈なレンガ造りの大邸宅で、その広大な建物と、まるでそこから見下ろすように位置する Shadrach 夫妻の食料雑貨店に陳列された、埃をかぶった棒砂糖やレーズン、お茶の缶などの描写は、両者の暮らしぶりの格差を対照的に表現している。Emily 夫妻の新居を Joanna 夫妻の向かいに設定することで、以後のこの二組の夫婦間における生計の格差を、より対照的かつ明確に描写し、Joanna の野心を一層増加させる効果を期待する作者 Hardy の ironic な作為性をここに見ることができる。

Emily 夫妻が向かいに新居を構えてからの、彼女に対する Joanna の嫉妬は、被害妄想と言っても過言ではないほどに加熱していく。

One summer day, when the big brick house opposite was reflecting the oppressive sun's heat into the shop, and nobody was present but husband and wife, Joanna looked across at Emily's door, where a

wealthy visitor's carriage had drawn up. Traces of patronage had been visible in Emily's manner of late. (114)

「向かいに立つレンガ造りの Emily 家の照り返しが, Joanna 夫妻の食料雑貨店に差し込む」や, 「富裕な訪問客の馬車が止まっている Emily の家の玄関」, また「最近の Emily の態度は, 恩に着せるようなところがあった」といったこれらの描写は, 明らかに「Joanna の偏見」“Joanna's jaundiced vision” (Dutta102) である。特に三番目の引用にある「Emily の態度」の描写については, 信憑性に欠ける。これらの描写から, Emily に対する Joanna の嫉妬を掻き立てようとする Hardy の意図が見られる。

Emily の富裕な暮らし向きを目の当たりにすることに耐え切れなくなった Joanna は, 二人の息子の将来を引き合いに出し, Emily の息子は間違いないで College に行くだろうが, 自分たちの息子はこのままでは Parish School に行かせざるを得ないだろうと述べ, そのような状況には耐えられないので, もっと豊かな生活を送れるよう何かいい案を考えて欲しいと Shadrach に懇願するのである。これを聞いた Shadrach は, 航海に出れば一財産を築いてくることが可能であると返答する。これまで, 船乗りの妻と言う半未亡人的環境になることを回避していた Joanna だったが, 野心が理性を上回り Shadrach のこの提案を了承するのである。Shadrach は, 予定日を一月ほど経過して無事に航海から帰還し, 約束どおり金貨を持ち帰る。帆布袋に入れて持ち帰った金貨を得意げに Joanna に見せる場面がある。

With this he[Shadrach] pulled out an enormous canvas bag, full and rotund as the money-bag of the giant whom Jack slew<sup>2</sup>, untied it, and shook the contents out into her lap as she sat in her low chair by the fire. . . .

‘There!’ said Shadrach complacently. ‘I told ‘ee, dear, I’d do it; and

have I done it or no?’

Somehow her face, after the first excitement of possession, did not retain its glory.

‘It is a lot of gold, indeed,’ she said. ‘And—is this *all*?’ (116)

ここに、Joanna と Shadrach の金銭における価値観の相違を見ることができ。Shadrach は、獲得した金貨が Joanna の満足を充足するに値するものであると確信し航海から帰宅する。しかし一方の Joanna は、金貨の入ったずっしりとした帆布袋を目にすると、金貨を手に入れたという興奮も束の間、Shadrach に対し、彼が持ち帰った金貨は海上で生活するには苦勞しないかもしれないが、陸上では一財産には値しないと言い放つのである。航海の成果に満足できない Joanna に対し、Shadrach は、最愛の息子二人を同伴して再び航海に出れば、一度目の航海より多くの金貨を持ち帰る可能性が高いことを示唆する。そして Joanna は、Shadrach のこの提案を多少躊躇しながらも結局は受け入れ、三人を海へと送るのである。Joanna の中で、一財産の入手と言う独善的野心が息子の生命の尊重を上回ってしまったのである。

Brady は強欲な Joanna を、グリム童話 “The Fisherman and His Wife” に登場する強欲な Isabel と比較し、次のように述べている。

But, like the insatiable Isabel of Grimm's ‘The Fisherman and His Wife’, Joanna is a more acquisitive and ambitious spirit than her husband[Shadrach]—she desires a university education for her sons, as well as a carriage and pair—and the spoils of Shadrach’s conquest are hardly sufficient for the investments she has in mind. (Brady131)

「漁夫とその妻」は、Joanna を思わせる強欲な妻 Isabel と、彼女と正反対の気質をもつ漁夫の夫の物語である。漁夫に釣り上げられたひらめが、

逃してもらった返報として漁夫とその妻に、それまで住んでいた小屋以上の広い家を提供するのだが、それだけでは満足しきれない強欲な妻は欲念をどんどん増加させ、石の城、王、皇帝、法王、果ては神になりたいとその都度夫をひらめのもとに送り、とうとう漁夫とその妻はもとの小屋暮らしに逆戻りしてしまうのである。作品の中では、提示する要望が叶うと強欲な妻は新たな野望を抱き、漁夫の夫をひらめのもとに誘動するのだが、そのたびに海の色は汚染されていく。この作品における海の色は、強欲な妻 IIsabel の精神の歪みの象徴である。Joanna も IIsabel も、強力な虚栄心と欲深い気質をもち、正反対の気質をもつ夫が妻の野心を成就させるために奮闘し、またそれぞれの妻においては、Joanna の場合は家族の喪失、また IIsabel の場合は、もとの小屋暮らしへの帰還という制裁が加えられる結末をもつという点において、両者は類似性をもっている。

また Paul Turner は、Shadrach を Tennyson の “Enoch Arden”<sup>3</sup> に登場する Enoch と比較し次のように述べている。

... Shadrach was a satirical version of *Enoch Arden*. Like Annie his Joanna proved a poor shop-keeper. But his purpose in going to sea was quite unlike Enoch's. It was not to save his wife and children from 'miserable lives of hand-to-mouth', but to gratify Joanna's social ambitions; not just to 'Have all his pretty young ones educated', but to help her compete with her neighbour, by sending her sons to 'College'. Enoch's faith in God (Cast all your cares on God: that anchor holds) was finally justified: he did come safely home. Shadrach, once 'providentially' saved from shipwreck like his Biblical namesake from the 'burning fiery furnace', was not this time 'plucked out of the burning'. (Turner138)



Turner は、Shadrach を Enoch の ‘satirical version’ とした上で、彼が航海に出る目的を、見るに忍びないその日暮らしからの妻や子供の救済でなく、妻 Joanna の社会的野心を充足させるためであると述べている。そしてその Shadrach の行為は、妻の野望、つまり息子に学問を付与するのではなく、息子の College 入学によって、皮肉にも Joanna の Emily に対する競争心を一層援助することにつながっていると述べている。また Turner は、神への信仰が正当化され最終的には帰還を果たした Enoch に対し、二度目の航海から戻ってくることのない Shadrach を、聖書に登場する同名の Shadrach<sup>4</sup> と重ね合わせ、両者の運命の類似と逆転性を示唆している。Hardy が、聖書に登場する Shadrach の存在を考慮した上でこの短編の Shadrach を創作したとすれば、Joanna の野心によって航海に向かう Shadrach の行為が導く彼自身の悲劇もまた、Hardy が意図する irony と言えるかもしれない。

これまで、短編 “To Please His Wife” で描かれる主人公 Joanna の野心を中心に、彼女と彼女の野心の対象である Emily の結婚生活を考察してきた。作品の中で Hardy は、虚栄心と貧欲に満ちた女性 Joanna と、「対照物」‘foil’ (Brady130) としての Emily という二人の女性を描き、それぞれの結婚生活における生活レベルの差異を対照的に描くことによって主人公 Joanna の野心を助長させ、夫と息子の喪失という ironic で悲劇的な結末を描写している。Hardy は、これら二人の女性の結婚生活を中心に、結婚前後における Joanna と Emily の社会的地位の逆転、二人の結婚生活における住居の位置関係、制度としての「結婚」が引き起こす生活レベルの格差、Joanna の無限な野心がもたらす大事な家族の喪失、また作品終盤におけるライバル Emily による ironic な Joanna の生活保護など、この作品の中でさまざまな irony を実に巧妙に絡み合わせている。夫と息子を海に奪われ、Emily の家で厄介になる Joanna について Brady は次のように述べている。

The woman[Joanna] who had subordinated her intense love for her children to a jealous desire to exceed her neighbour[Emily] in social standing is suddenly transformed into the sailor's widow of the ballad, lamenting the treachery of the sea and haunting the scenes of happier days. (Brady132)

これまで、Emily より社会的あるいは経済的に優位に立つことを、わが子への深い愛よりも重要視してきた Joanna が、海の不実を嘆き、平凡ながらも息子と夫とで暮らしていた幸福な頃を脳裏にかすめながら、Joanna はバラッド的な船乗りの未亡人へと変貌していく、と Brady は述べているのである。作品の結末部分において、Emily の家で厄介になる Joanna が、夫と息子が出港して6年が経過したある12月の夜中に、Shadrach と息子たちの声を感じて裸足で軒先へ駆け出し、その姿を求める場面がある。

She[Joanna] sprang out of bed, and, hardly knowing what clothing she dragged on herself, hastened down Emily's large and carpeted staircase, put the candle on the hall-table, unfastened the bolts and chain, and stepped into the street. The mist, blowing up the street from the Quay, hindered her seeing the shop, although it was so near; but she had crossed to it in a moment. How was it? Nobody stood there. The wretched woman walked wildly up and down with all her bare feet — there was not a soul. She returned and knocked with all her might at the door which had once been her own — they might have been admitted for the night, unwilling to disturb her till the morning. It was not till several minutes had elapsed that the young man who now kept the shop looked out of an upper window, and saw the skeleton of something human standing below half-dressed.

‘Has anybody come?’ asked the form.

‘O, Mrs Jolliffe, I didn’t know it was you,’ said the young man kindly, for he was aware how her baseless expectations moved her. ‘No; nobody has come.’ (122)

この頃の Joanna に以前のような強欲さは感じられず、「Joanna は、今は亡き人々のためにいつもの祈りを捧げていた」“Joanna had prayed her usual prayer for the absent ones ...” (122) のように、一向に戻ってこない夫と息子を思って毎日祈祷を捧げている。しかしこの日の祈祷は、「ここ何ヶ月で捧げた祈祷の中で、最も熱意のこもった自信に満ちたもの」“...more fervour and confidence than she[Joanna] had felt for months...” (122) であった。その夜、夫と息子の気配を感じて軒先へと急ぐ Joanna の姿には、もう、彼らが持ち帰るであろう金貨への期待といった邪悪な感情は見受けられない。むしろ、家族の帰還を願う本来の人情から生じた行為であると見受けられる。夫と息子二人を奪った「海」は、「浄化」としての象徴を意味する。<sup>5</sup> 家族の喪失によって得る人間としての本性の回復が悪の「浄化」であるとするなら、これもまた Hardy が意図する irony があるのではないだろうか。そして、真の帰還ではないにせよ、Joanna が待ち望んでいた夫と息子の存在を、気配だけでも作品の結末部分に登場させたことも、Dutta が “narrative/authorial sympathy” (Dutta102) と述べるように、家族を喪失してからの “mental torture” (Dutta102) つまり、「野心のために夫と息子を奴隷にした罪に対する、Joanna の魂の浄化」“her[Joanna’s] purgation for the sin of making them[Shadrach and two sons] the slaves of her ambition” (120) を終えた Joanna に対する Hardy 流の慈悲、愛情であるように思えるのである。軒先から “‘Has anybody come?’” (122) と尋ねる Joanna に対し、かつての Joanna 一家の住まいの現在の所有者である若者が、上の窓から “‘O, Mrs Jolliffe, I didn’t know it was you,’ said the young man kindly...” (122)

と返答する様子の ‘kindly’ という言葉の中に, Dutta は Hardy の慈悲を見ている。いずれにせよ, 作品終盤における描写に作者 Hardy の Joanna に対する慈悲, 同情が存在するという考えにおいては筆者も Dutta と同意見である。

短編のタイトルである “To Please His Wife” の ‘please’ は, 「満足させる, 喜ばせる」を意味するが, これは皮肉にも強欲な妻 Joanna の ‘ambition’ を成就させることを意味する。しかし, Emily からの Shadrach の奪還に始まり, Emily の裕福な生活を羨望し欲求不満を増幅させる Joanna の野心には, 作品を通じて際限がない。そして Shadrach は, 妻 Joanna の ‘ambition’ を遂行するため一度のみならず二度もの航海に出向き, 同伴させた息子とともに二度目の航海からは帰還することなく作品は幕を閉じるのである。そう考えると, Joanna のこの無限な ‘ambition’ を成就させようと奮闘する夫 Shadrach の行為自体もまた ironic であると言えるであろう。そしてまた, “social pride” (Dutta101) に固執しさらなる野心を抱く Joanna とは対照的に, 彼女を取り巻く「Shadrach と Emily の両者は社会的昇進への関心をもつことなく幸福の基準を見出す」“... Emily and Shadrach, who, by their lack of concern for social advancement, find a measure of happiness” (Brady130) 人物であることもまた, ironic であると言える。妻 Joanna の野心について考えてみると, その対象は絶えず向かいに住む Emily の生活であり, 一方の Shadrach については, そんな妻の ‘ambition’ を成就させようとひたすら奮闘するのである。夫婦でありながら, 最後まで重なり合うことがないこの二人の価値観における不調和が, ironic な終局を迎えさせるのである。それ故に, Joanna と Shadrach における夫婦としての価値観の相違もまた ironic であると言える。しかし最も ironic なのは, 作品を通じて終始 Joanna の野心の根源であった当の Emily 自身は, Joanna の野心を一度も察知することなく, また Lester との結婚によってもたらされた社会的地位における優越にもかかわらず, 彼女の Joanna に対する態度や言動は, 結婚前と

全く変わることはないものであった点にあると思われる。これらを総合して考えると、この短編 “To Please His Wife” は、Joanna の野心だけが独り歩きした、言わば、一人の女性の被害妄想とも言える ‘ambition’ が引き起こした悲喜劇とも言えるのではないだろうか。

本稿は、2004年10月23日（土）に日本英文学会中四国支部第57回大会（於 山口大学）にて口頭発表したものに加筆修正したものである。

#### 註

- 1 詩 “The Sailor’s Mother” の中で Hardy は、短編 “To Please His Wife” に登場する女主人公 Joanna の、家族を海に喪失した悲哀を歌っている。
- 2 *Jack and Giant Killer* (巨人殺しのジャック [英国民話の主人公で Cornwall の農夫の息子；隠れみの・飛行靴・金剛剣・全知の帽子の四つの宝物を得て、国中の巨人族を退治してしまう]) を参照。*Jack and Giant Killer* のこの参照は、Joanna と Shadrach の住む世界観の相違を強調している、と Brady は述べている。
- 3 航海から戻ってこない夫 Enoch の妻 Annie は、幼友達 Philip Ray と再婚するが、のちに孤島から救助され Enoch は帰還する。しかし Annie の再婚を知って、死ぬまで自分の帰還を知らせない。1864年に発表された Tennyson の詩。
- 4 聖書に登場する Shadrach は、Meshach, Abednego と共に Daniel の友人の一人とされ、Nebuchadnezzar の造った金の像を礼拝するのを拒絶したため、燃えさかる焔に入れられたが神の恩恵で難を逃れたとされている。
- 5 『イメージシンボル事典』によると、「海」は多様なシンボルとしての意味を合わせもつが、その一つに「浄化」としてのシンボルの意味があるとされている。Euripides のギリシャ神話 *Iphigeneia in Tauris* の一節を例に挙げている。  
 (“The sea washes all men’s evils away.” 「海はすべての人間の悪を洗い流す」)

#### 参考文献

- Brady, Kristin. *The Short Stories of Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1982
- Dutta, Shanta. *Ambivalence in Hardy: A Study of his Attitude to Women*. London: Macmillan, 2000
- Hardy, Thomas. “To Please His Wife”, *Life’s Little Ironies and A Changed Man*. London: Macmillan, 1977
- 大沢衛. 『ハーディ研究』東京：英宝社, 1977
- 高橋健二訳. 『漁夫とその妻』【グリム童話全集1】東京：小学館, 昭和51年
- Tennyson, Alfred. *Enoch Arden*
- Turner, Paul. *The Life of Thomas Hardy*, Massachusetts: Blackwell Publishers, 1998
- 山下主一郎訳者代表. 『イメージ・シンボル事典』東京：大修館書店, 1984